
World of Fantasy 改訂版

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World of Fantasy 改訂版

【NZコード】

N7775Y

【作者名】

K_Sayuto

【あらすじ】

謎の大量失踪事件

その背景にあるものとは？

地球と異世界、敵と味方、疑いと信頼。 それぞれの思いを載せたFantasyが動き出す。

プロローグ

—友人の失踪—

それまではただそれだけの事件であった。

—さらなる失踪—

そこで、何か集団的な組織が動いているのでは?と言つ噂が流れ るようになつた。

—共通点—

失踪した人たちの共通点が見つかった。だがそれはとても信じ難い事だった。皆があるオンラインゲームやつていた、ただそれだけの事だった。

「なあなあ、あの噂聞いたかかみにやん」

下校途中と思しき一人の制服に身を包んだ男が歩いていて片方が先に口を開いた。

「えー、しらなーい」

「ほらあの失踪事件だよ」

「あー、あれかあ。あれがどうしたのさ?」

「俺たちもやつて見ない?」

「いいんじやない

「おっしゃ、じやあ帰つたらすぐスカ プ繫いでくれよな

そしてソラ路で別れた。

登場人物

ショウ・伊志井 将

今作の主人公、高校一年生。玲奈の事が好きだが告白などした事はない。オカルトや魔術が好きだったので魔法関連のジョブについてする。

かみにゃん・桂峰 神紅

ショウの親友、同じく高校一年生。剣術には心得があったので「V」があまり関係のないW.O.F内では相当な強さをほこる。

ティア・桜ヶ丘 知

いわゆるネカマだったのだが、W.O.Fの世界に入ってしまい、使っていた口リキキャラになってしまった。

ユーキ・佐藤 勇季

ショウの友達、同じく高校一年生。

レーナ・阿久津 玲奈

ショウの友達、同じく高校一年生。実はレーナもショウの事を思つていたり。

第一話 パーティー結成

その時はまだ信じられなかつた。LVが5に達した時に俺が持つていたはずのマウスは杖に変わり制服はローブに変わりPCの画面に広がつていた世界は今自分の周りに広がつている。

「は？」

第一声はそれであつた。

「やれやれ本当にこんな事になるなんてなあ」

容姿は確かに変わつていたが頭の上に表示されたキャラネームは『かみにゃん』だつた。

「かみ・・・にゃん？」

「あつ、シヨウ」

と不意に後ろから誰かの叫び声が聞こえた。

「な、なんじゃこりゃー」

その声は幼げなソプラノボイスだつた。声の主を見ると先ほど出会つて一緒にいた幼じ、げふんげふん、小さな女の子がいた。

「ティアさん？」

暫くその女の子は放心していた。しかし、突然はつと意識が戻つ

たよつで急にこんな事を言い始めた。

「ほんなん幼女じゃハーレムなんて作れねえよー」

セイで俺は気がついた。

「あのーティアさんはもしかして中身男ですか?」

「えつ、いやそんな事ありませんよ。お、わ、私は中の人も女ですか?」

「今俺つてこいつとしたよなんかみにゃん?」

俺が問いかけると。

「ちうだなあーショウ」

セイでティアは認めたのか。

「あーちうだよネカマだよ今じや男の娘だよ悪かったかー

「まあ、いいんじゃないのか?」

とかみにゃんが言つて俺も肯定しておいた。

「ち、ちうだ今なら女のアレが好き放題触れるじゃんか

そういうヒーリングアートは胸に手を当てるがセイは断崖絶壁が広がっていた。

「そ、そんな。うそだあー」

「とりあえず、ティアとかみにゃん一皿につかないといこひに行こひ

「んー、僕も賛成」

ティアはまた放心していた。俺たちは急いで一皿につかないこところへ逃げ込んだそこは小さな洞窟だつた。

「ん、あの奥にいる人誰だろ?」

かみにゃんが気がつき俺も気がついた。とりあえずティアはそらへんにおいておいた。

少しづつ近付いて行くと、その人の頭の上にあるキャラクネームが見えた。

「『ゴーキ』つてまさかあのゴーキ?」

そこまで俺が言つたといひで、後ろから誰かの声が聞こえた。

「ああ、追い詰めたわよさあそつそと降参しなさい」

と女の人に入つてくるがこつちを見て驚愕きよくがくした。

「え、ショウとかみにゃんつてまさか?」

「だ、誰だッ!」

俺が叫ぶと、その人は答えた。

「私だよ阿久津 玲奈だよ」

「れつ、玲奈さんー？」

俺が驚きの声を上げるとコーラキが目を覚ました。

「いてて、わざい取り逃がした。ん、ここいつらは？」

「お前見て気がつかないかなあ？」

「ああ、お前らもか。悪いけど肩かしてくれないかショウ」

「ああ、お前やっぱ秋季か？」

「そーだ、そーだ、クリームソーダ」

・・・・・、多分今ので体感温度5度くらい下がったかな？

「そう言えば、そのティアってひとほどなた？」

そう聞いた時、ティアは焦っていた。しじみがない、助け舟を出してやるか。

「えつとな、こいつは先ほど出合つた女の子だ。どうやら何かの事故で記憶を失つたらしいんだ。だから今はなんもわからないからレーナさんから教えてやつてくれないかなあ？」

俺がそう言つとティアは小声で

「何でそんな設定なんだよ」

「そっちの方がいいだろ、過去とかいろいろ詮索されずに済むし第一、お前は元男なんだから女の子の事を知らないんだからそれを隠すためもある、後これからは男口調を絶対使うな」

そう言つて俺たちがコンコン話していたのを見たレーナさんは口を開いた。

「なーに、コンコンやってんだかまあいいけど。とにかく、一応聞いておくけど、これから私たち仲間になるのよね?」

「まあ、そりや一緒にの方が安全だろ?しねえー」

今まで黙つていたかみにゃんが話す。

「でも、幸いな事にこの世界は「^{レーナー}」はあまり関係ないから装備と個々の能力、それにジョブとコンビネーションをえしつかりしてれば何とかなる。っと、もう大丈夫だ一人で立てる」

「えーと、とりあえずみんなのジョブをまずは聞いておかなくちやだね。私は魔銃士スペルガンナーでゴーキは魔法戦士マジックナイターだよシヨウ達は?」

「俺は、とりあえずは治療師ヒーラーでかみにゃんはサムライでティアは・・・なに?」

「えつと、お、私は・・・何だら?」

「ポケットに携帯入つてない?」この世界ではじりやり携帯がウインドウの代わりになつてゐるから

「あつ、ほんとだ」

ティアがポケットから出した手に握りていたのはスマートフォンだった、いわゆるスマホだね。

「ええと、きり・・・・・さき・・・・・し、
霧裂師だ！」
ミスト・スラッシュ

」！・！

「嘘だろ、霧裂師つてスーパー・アジョブで100億人に1人出るかどうかってジョブだろ」

「やつ言えばヨーキとレーナーなんぞ」の世界に詳しいみたいだけ
どどひして?」

「ああ、それはだな」

「いい、私から話す。この世界はW.O.Fとほぼ同じ世界、といつかほんどの事が全く一緒なんだけど少し違う世界なの」

なるほど、それでやつもまでいりこり知つてゐよつたな口ぶりだつたのか。

「じゃあ、俺たちが持ってる知識でもある程度はもう通用するって訳か」

「そりそり、それで……。続きは宿屋でしまじょ」「

そうレーナさんが言つた後に当たりを見渡すとティアとかみにや

んは寝ていた、しかもかみにせんせ立ちながら。

「それもそうだな、ティアはレーナさんが頼む、ショウはかみにせんせたのむ」

やう言つてユーリは立ち上がり歩いて行った。俺たちもその後を追いかける。

World of Fantasyとは？

とあるオンラインゲームの名前で今回の冒険の舞台。略称は『WF』

システムは一般的なレバ性だがレバが上がつてもステータスは対して変化はない、レバが上がれば新たに技を習得するぐらいである。

だからレバでもテクニックさえあればレバ10にも50にも勝てると言つ事である、あくまでスキル使用禁止での話だが。

主にステータスはジョブによつて何かが高くなり何かが低くなるものである。それ以外のステータスの変動は装備品か強化魔法、または何らかの加護以外では基本的にあり得ない。

ジョブは数が豊富でざつと200を超える、そのうち大体20位がスーパー・レアジョブ、つまりユニークジョブである、霧裂師もこの中にはいる。

とまあ、この辺りまでは基本的なオンラインゲームと同じじである。

種族

ヒューマン
人間 属性：大地

全てのステータスにおいてバランスの良い種族、基本的にどんな装備でも上手く使える。

ケット・シー
猫人 属性：星

猫本来の身軽さにより俊敏力、回避力がすば抜けて高く攻撃力もある程度あるが防御は低い。主にクローやなどの武器を使う。

ファングラ
犬人 属性：炎

攻撃力、俊敏力に長けていてヒットアンドアウェイの戦法が得意。犬の種類によつて特性が変わつてるので場合によつては連携が得意になる組み合わせなどがある。

ヴァンパイア
狼人 属性：風、月

攻撃力、回避力、連携がとても高く速攻撃タイプ。連携がとても得意で知能も高い。

グリジフィックス
熊人 属性：大地

攻撃力、筋力、防御に優れていて、パーティの主力となる存在。

ドワーフ
怪力人 属性：炎

その体からは想像できないほどの怪力を持つていて、指先も器用なので生産などもお手の物。

妖精 エルフ 属性：風、水

人魚の様に魔法、弓に長けている種族。あまり数は多くない。

人魚（マー・メイド・ト・マー・マン） 属性：水

女の場合はマー・メイド、男の場合はマー・マン。魔法や弓の扱いに特化して。普通は人間の姿だが、水に触れる事により人魚の姿へと変わる。

翼人 ハーピィ 属性：風、天空

野獣化が使用可能な種族で使うと背中から羽が生えるが生える時の痛みは相当なものでありたがる人はいない。

聖人 セイント 属性：聖、太陽

賢人に劣るが相当な知識と頭の回転力を持ち近接も可能な魔法戦士つぽい種族。

賢人 マー・ブライブ・ラリイ 属性：無

戦闘においては役立たずだがその頭の知識、回転力は群を抜いてるので、策士などの役目を与えると真価を發揮する。

竜人 ドラゴニカ 属性：炎、天空

熊人の全てを上回る大変希少な種族。どんな戦いでも勝利へと導く勝利の女神の加護がある。

天使 エンジェル 属性：聖、風

悪魔と対をなす種族。魔法においては攻撃系よりもサポートに特化しており近接でも十分戦える。

悪魔 デーモン 属性：闇、炎

天使と対をなす種族。魔法においては攻撃系に特化しており。禍の象徴として恐れかれている。

神人 アポストロファイ 属性：神

神以外で神に果てしなく近い種族。現在もその種族の末裔まつえいがいるかどうかは不明。

幼女 ロリ 属性：ボクツ娘

大つきいお友達に人気な・・・「冗談です、すみませんwww

どの種族も見た目は人間となんの変哲へんてつもないが妖精や猫族などは少し小柄こがらなほうで、竜人や熊人は大柄おおがらな方であると言う事だけ。動物系の種族は野獣化フランクショーアウェイク、竜人は半竜化ドラゴニーケス、神人は半神化アポストロファイアードなどを使う事により本来の姿へとなり種族の特殊能力のアップやステータスの飛躍的向上などが起きる。

野獣化を使用できる種族は興奮状態に陥ると半獣化状態になり、猫

の場合人間×猫耳×猫尻尾状態になりその種族の特性が目立つようになる。

第一話 覚醒、チートスキル

「と、まあ」こんな感じかなあ

俺はレーナさんに聞けるだけの事を聞いた。

「現時点では何もヒントはない……か」

「え、なんの?」

俺は一泣おいてその問ごとに答える。

「いやあどうやら元の世界に帰れるのかって事、まあ普通に考えれば魔王を倒すとかそのあたりなんだなって感じ

「えっと、その事なんだけど今日シロウくん達に会つてしま前に怪しい奴らがいて追いかけてたんだけど……」

「その途中で逃げられ、ゴーキもやられた……と?」

「うん」

暫く沈黙が続いていた。

「じゃあ、あこつらを捕まえるのが当分の目標かなあ。

「じや、話は簡単だそつらをぶつぶつ潰す」

「いや、ぶつ潰しちゃダメでしょ」

レーナさんが慌てて正す。つてかかみにゃんねきたのかよ。

「捕まえて情報を、つてもう寝てるよー!?」

「ははは f^__^~」

翌朝

「みんな聞いて、昨日ショウくんと今後の事を考えた結果・・・
3日よ、3日でパーティーのコンビネーション及びレバ上げをする。
そしてその後は例の奴らの搜索」

「別に僕はなんでもいいよー」

「俺も異存はない」

「俺も異議ないよな?」

「異議なし」

「多分大丈夫」

「それじゃ、トレーニングよ」

1時間後

「ハアハア、まだ終わってないのか?」

俺たちはいきなりながら死に直結するかもしないミスを犯して

しまった……それは。

「もうっ、なんで3人とも装備初期状態でしかもモンスターハウスにはまるのおおお」

「ふんっ、だが僕の敵ではないっ」

そう言つてかみにゃんは初期装備のショートソードを手に敵のど真ん中で暴れまわる。

「かみにゃん、へるふみ～。ヒーラーがどうやって一人で10体もあいてしなやならんのだあー」

「だが断る」

かみにゃんはそう言つて髪をかきあげる。そんな事しないで助けてマジでやばい。

「いや、残りHP5なんですけど」

「ええい、ヒールガン」

レーナさんの杖銃フレイブルガンから緑色に輝くHP回復効果を持つ光が飛んできて、敵にあたる。

「あっ」

あっ、じゃないよあつじやまあ期待してなかつたけど。

「ええい、秘技、ポーションがぶ飲みー」

「やばいよお～、この口リの体がひめいあげてるよお～。もひ
げんかーい」

そう言つてティアが床に伏せる、いわゆる死んだふりだ。

「ティアーお前もたたかええー」

「いやだあー、なんもスキルないんだもーん」

そう言つていると。

「ティア、レベルアップ ルバ15 スキル習得 スキル名 《バスター霧鎌鼬》」

と、ティアの端末からのアナウンス。

「ああもうつ、いつくぞおー【霧鎌鼬】」

ティアがスキルを発動すると、ティアの周りに霧が立ち込め、急に霧が四方八方に弾ける。弾けた霧に触れたモンスターは触れた部分から切れた。そして、見事に20体はいたであろう魔物は全て肉片となつた。

「レベルアップ ルバ スキル習得」と言つアナウンスがいたるところできこえた。

なんだよそのチートスキルはー

第三話 心が読める青年

あたり一面魔物の屍骸。どんなチートスキルだよと思いつれをはなつたティアに視線を向ける。

「ハアハアハア、うつ

ティアは胸に手を当てて息が切れていたかと思つと急に倒れた。

「ティアっ」

俺はすぐに駆け寄り受け止める。

「ティアちゃん？」

遅れてみんなが集まつてくる。俺はティアの心臓部分に手を当てるとトクントクンと確かに心臓は動いていた。

「一体なんなんだ？」

俺の問いに答えたのはヨーキだつた。

「強力なスキルにはそれ相応の精神力が必要だから、耐えきれなかつたんだろう」

「そつか、まあ助かつたな」

俺はティアを抱きそのままみんなと一緒に戦い始めた。

『ティア編』

目が覚めるとあたりは真っ暗でベットの上だった。
そつか、あの時に意識を失つて。

私は宿屋からでて少し風にあたるために外へでた。

「わあ、綺麗」

空には星がたくさん光つていたが視界の左の方に人影が見えた。

「よつ、田が覚めたか」

そこにいたのはショウだった。

「なんだ、ショウか」

「俺で悪かつたな。ところで、お前体大丈夫か？」

「うん」

「そーか、つたく心配したんだそー。お前の心臓付近触つて見たら心臓は普通に動いてたけどさ」

は？今なんて？心臓付近、つて胸？男に胸触られた？

「まさか、お前胸触ったのかー、」のロコマー。

私は多分顔が真っ赤だったと思ひ、シコウに殴りかかって片手で止められた。

「やつぱりな、そんな反応するつて事は……お前女だろ?」

「は、何を言つて?」

「あー、言ひ直そう。お前元の世界で男だったつての嘘だろ。男だったらはじめの方はそんな反応はしなこり。まあ確かに器に合わせて心は変わつてくけど一日や兩日で変わるなんてあり得ないしな」

「……いつから気がついていたの?」

「はじめから、俺さ人の心が読めるんだよ」

「ふうん、なるほど。って、あつまだ私胸触った事許してないよ?」

ぱつつて顔をシコウにする。私はそのまま言い続ける。

「一体どんな形で責任とつてくれるのよ、こんな小さな女の子に手口出すなんていのロコマー、私もしも、もじゅ」

あれ?止まらない?感情的になりすぎてロコトロールが効かない。」のまじやんでもない事を言つてしまいそ。

「お嫁に行けなかつたらあんたが貰つてよね

あー、言っちゃつたー。多分今の私は顔が真っ赤を通り越して真っ赤つかなんじやないかと思う。しかもショウはすごい困つたような顔をしていた。

「あー、じやあお前も早く寝ろよなあー。お休みー」

あ、
逃げた。

でも、心が読める人……か。あーあ、なんか明日嫌な予感するなあ。嫌な予感は当たるけどいい予感は外れるって言葉もあるし。

私はすぐそばの海に向かって歩き出した。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」

私はしばらく歌つていた歌つていたと言つてもつる覚えの音楽に
合わせて適当にラーつて言つてただけどけび。

「綺麗な声だね」

不意に後ろからかけられた声に振り返る。その声の主は青年だつた。

「おつがとう」

「もう少し歌つてくれないか？」

「うん」

そう言ってまた私は歌い始める。

第四話　「」の口止められたサムライスタイル

翌朝　《レーナ編》

「あーって、昨日はティアちゃんのおかげでいつも予定よりも早く目標一ヶを達成できましたー」

わー、パチパチ。と効果音がでてそつだがあたりは静かだった。

「みんなテンション低くない?ビーッしたのー?」

「ビーッしたのー?と言われても、ティアはインザベットだしがみにゃんはまた立ちながら寝てゐじゴーキは50度寝してゐじ

50度寝つて一体何時から寝たり起きたり繰り返してゐのよつ、と突つ込みたかったが先に言いたい事があつたので飲み込んだ。

「さて、今日はみんなの装備を整えたいと

「僕は和服に刀で」

「かつこーい鎧があればなんでも」

「むこやむこや、私はペンクのワンペース」

つて、なんで装備の話を始めた途端にみんな会話に迷ふのよ。

「俺は・・・治療師だからそれっぽければなんでもいいかな」

「うーん、とつあえず昨日のドロップ品の装備とか回復薬とか分配して余つたのは売ろうつか

「せんせー」

「えっと、分配するものはポーションが128個つて多すぎ。それに短剣、名称は『ストライクダガー』。他には刀があるね、名称は『魔刀 鷹の翼』か、翼つてなのとおり軽いねー。後は・・・短剣、名称は『ステイレット』かー、短剣にしては長いねえー」

「よし、僕がその刀をいただこう

そう言つてかみにゃんが刀を持つていく。

「私はこの短剣を

ティアちゃんはストライクダガーを持つていく。

「じゃあ、俺これ持つてくから転職する

そう言つてショウガが持つていぐ。

「よし、街に装備を整えに行こう

「」「おー」「

ゴーキの発言にみんなが賛成する。

『ゴーキ編』

とりあえずいろいろとありますみんなの装備を説明しよう。

ショウ

武器：スティレット

頭：バンダナ

服：ローブ

かみにゃん

武器：魔刀 鷹の翼

頭：サングラス

服：デンタラスの服

いわゆる和服（黒）

ティア

武器：ストライクダガー

頭：大きなリボン（赤）

服：ワンピース（ピンク）

レーナ

武器：キヤンデルブロード

杖銃の一種で遠距離特化

頭：ガンナー・キヤップ

服：パークー

ユーキ

武器：ショートソード

頭：バンダナ

服：チエーンメイル

「よーっし、一通り揃つたな」

「うん、俺もこれでいいかな」

「ちよりとまひてよかみにやんそれ危ないんぢやない？」

そう言ってレーナさんが指差したのは刀身剥き出しの^{むきだし}みにゃんの刀だった。

「 そうだなあ、 そうだ知り合いに鍛治職人がいるからそいつに鞄かばを作つてもらおう 」

「ん、その人ってこの世界の住民？」

シミウが訪ねてきたので答える。

「まあな、前に危ないところを助けたんだよ」

- 1 -

「あそこに水車が見えるだ？」
「その隣の家だ」

俺がそれを書いてその家のそばまで行き家の扉を開けた途端に

- ४ -

一人の女の子が俺に抱きついてきて俺はよろめき後ろの川にドボンッと水しぶきをあげて落ちた。

第五話 ダイアモンドの全力疾走は意外に疲れる

《シヨウ編》

いきなりヨーキに女の子が飛びつきをしてヨーキはそのまま川へと落ちた。

「大丈夫かヨーキ？」

俺が呼びかけると「大丈夫だー」と返事が帰ってきたので安心する。

「で、その子誰？」

「えっとー、じーじの鍛冶屋の娘さん」

レーナさんの質問にヨーキが答えると女の子は起き上がり自己紹介を始めた。

「始めてまして、私は刀衣と申します、それでいてヨーキの許嫁です」

許嫁ですつと詰つ時にヨーキの腕に抱きつぶ。

みんなが驚いていると「いや、許嫁じゃないから」とヨーキの修正。

「えー、私の心はもう初めて出会った時からメロメロですよー」

「ゴーキビんなテクだ？」

俺が聞くとユーキは

「テクなんかねえよ、ほら危ない」といを助けたつてのがこいつ
だつたんだよ」

「バリバリフラグ立てたねえ」

レーナさんがそう言ってティアを連れて鍛冶屋に入つてく。それ
に続いてゴーキ以外のみんなが入る。

鍛冶屋の中はドラ ハなどこよくありそな感じだつた。

「おとーさん、ユーキきたよお」

と刀衣が言うと奥の方から大柄な人が出でてきた。

「おお、いらっしゃい。つてユーキびしょ濡れじゃねえか」

「あー、ちょっとね」

「ほれ、奥にタオルあるからそれ使え」

どうやら店主と思しき人は外見の割に優しい人のようだ。

「えーっと、今日はどんな用で?つて見りや鞘が必要だつて分か
るか。おいおい、君が持つてゐる魔刀じやねえか」

店主がかみにやんの刀を見て言つ。

「あー、これね。魔物が落とした」

かみにゃんが刀を差し出しながら囁く。

「で、これに合ひ鞄つてわけか……ん、その二人が持つてる短剣にも鞄が必要みたいだな。作つておくから待つてなさい」

そう言つて店主は奥に行く。

「ねえねえ、ゆーきーあわせあわせ~」

刀衣はユーキの腕を降りながら甘えてくる。

「分かつた分かつた、じゃ外にでよつな」

「ねーねー、ていっちゃんも一緒に遊びたーい」

ていっちゃんとは多分ティアの事であろう、その当のティアは武器を眺めている。刀衣はティアの手を引つ張つてユーキと一緒に外へ出る。

「わて、僕は寝るか」

そう言つてかみにゃんはそばの椅子に腰掛け。

「シヨウ君私達も行こつか」

「ああ」

外へ出ると刀衣はボールを持っていてゴーキは棒を持っていた。

「野球かー、よつしゃー燃えて来たつ。ゴーキかつ飛ばせー」

俺はそういうながらじきとつなポジションへ走つて行く。

「ふふふ、ゆーめいーに私のボール打てるかなあー?」

「ふつ、生憎あいじやお子へんちやまに負けるよつな腕は持つてない」

「よつし、いっくゼー」

やつ言つて刀衣はモーションにはいる、そしてゴーキも構える。

「覚悟つ、必殺殺人必中ストライクキラーボール」

「つて、俺に当てて殺したいのかストライクを取りたいのか全くわからんねーっシ」ロリビンの多い名前だな、おい

「とか必殺と殺人とキラーの時点ではつは殺すつもりだし、しかも必中までもはいつてる。死刑狙い確實だなwww

やつ思つて見てみると思つたとおりボールはゴーキの顔面にまつしへり。

「あぶねー、ゴーキ避けひつ

「黙れ小僧つ、《ファイアースライド》」

《ファイアースライド》とは武器に炎を纏まといわせるスキルだ。スキ

ルの効果により炎を帯びた棒はしっかりとボールを捉えホームラン級の当たりを繰り出す。

「レーナさん、なんか吹っ飛ばす魔法がなんかで俺を飛ばしてくれ」

「う、俺が走り出しながら『おと』とレーナさんは言つて杖銃を取り出し構える。

「『H』アーチョット》フルパワー、チャージオンツ・・・・・はつしゃーー」

『H』アーチョット》とはそのままで風を撃つ魔銃士のスキルだ。そのスキルによつ出来た風にのり、俺はボールの落下地点まで行く。そして。

「あやーつち

レーナさんがそう言つて俺の手にはボールが収まつていた、が。急にボールが発火し俺は落としてしまつた。なぜドーベースの技が再現されてんだよ。

「おっしゃー、そんだけとばせばどのみちランニングホームランだぜ」

ヨーキはダイアモンド（実際にはベースすらないが）を走つて言う。

「あいつ、おっとなげない

それを見てレーナちゃんが叫び。確かに飛ばしうるだなあと俺も思
う。

「うう、うう」

あ、泣こむやつたか? うつ想ひで泣いていたわ。

「やーきこーかっここよーーー

と叫び始めた抱きこもった。

第六話 処女の危機

「ゆーきーー、次は何して遊ぶのー？」

「そうだなあー、じやあ」「

とユーキが答えようとした時、【殺意】が感じられた。そう、俺は人の心が読めるからそう言つた感情も感じる事ができるのだ。

「ユーキ、刀衣を守れー」

俺がそう言つた直後、どこからともなく何かが刀衣に向かつて一直線に飛ぶ、がそれは突如間に現れたユーキの体の中へと消えた。

「ぐつーー？」

そう言つて腹を抑えるユーキの手は紅に染まつていた。

「敵？」

レーナが銃弾が飛んで来た方に杖銃を構える。

「ゆーきーー、しんじややだよ」

「大丈、夫だ。これぐらい、魔法で、何とか、なる

俺は急いでユーキに駆け寄り《ヒール》を唱える。しかし、傷が深すぎて回復が間に合わない。どんどん血が出てくる。俺は何度も《ヒール》を唱える内に銃弾が飛んで来た方から2人の男が現れた。

「やつベー、ミスつちまつた。ジーあるー」「ウヘ?」

ライフルを持った男が尋ねる。

「キソダだからもう少し粘れと言つただろ?」

黒い鎧に身を包んだ男が言う。

『テイア編』

卷之三

卷之三

迷子力

と叫ぶ少女 そこそこの少女こそアーヴ

「アーリー君ー? みんなアーリー君ー?」

ましい、そーとーましい。といふかなんで当たり一面雪景色なの?

どーしょーもなく歩いていると不意に後ろから肩を掴まれた。

ひがつ！？

そう思わず声をあげてしまひつかんで来た者を見上げる。

「やあ、君一人かい？ 良かつたら俺とぶへえ」

私が殴りその瞬間に少し距離をあく。

「ふ、なかなか痛いじゃないか、そういう風に嫌がる口についてねえいいねえ最高だねえ」

まづい、こいつ変態だ。そう直感した。私は少しずつ後ろへ下がつていくが急に何かが足を掴みその場に倒れてしまう。

「いつ、たあ、なにこれ？」

それをよく見てみると骨の手だった。私はそれを見て恐怖に溺れた。

「ダメじゃないか、口にはあまり乱暴をしちゃいけないよ。あ、こわがらせちやつたねえ、ここの子は僕のしもべさ」

「いつ、まつまつこの骨だらつて言ひ事ば。

「死靈使い（ネクロマンサー）」

「あつたりー」

私が答えると男は指を鳴らし答えた。そして、急に私の上に覆いかぶさつて来た。

やばい、処女の大ピンチ。

やう思つていろいろと対処法を考えると一つの方法が思い当たつた。それはまだ未使用的ジョブのスキルを使用すると言う事だ。だ

がそのジョブの説明を見る限り、最悪命の危険まで伴うといつが、この際かまつてられない。私は使う事にした、そのジョブの名とは『羅刹使い（らせつつかい）』その一番初級のスキルの使用方法は自分の血を捧げる事だった。私は手を握りしめた、そして爪を手のひらにつきたて鋭い痛みとともににじわじわと血がにじむ。

「我が血を喰らいて我が前に降臨せん、出でよ死体喰らい（アンデッドイーター）の暗黒魔グレンデルよ」

私の血が地面に垂れ、そこから魔方陣が浮上する。そして、1匹の生物が姿を形成し始めた。

第七話 「あら、ああ」はとある国の冒険者「アラマー」

《シヨウ編》

「さあて、どいつから葬り去ろうか

黒い鎧の男が言う。俺はその時必死に頭を回転させていた。ユーキは今戦闘に出せない、かみにやんもてんちょいつも呼びに行く暇なんかない。ティアも何処かへ行ってしまっている。この状況で戦えるのは俺とレーナさんだけだ。おまけに一人とも後方支援型。まさかとは思うが刀衣が戦えるとも思えないが・・・一応聞いておくか。

「なあ、刀衣、お前どのくらい戦える?」

「つづぐ、私は、猫人だから、戦える、ゆーきーの為に戦う」

猫人か、だけど今武器を持つてるのは思えないジョブを聞いておくか。

「ジョブはなんだ?」

「私は、魔法師マジシャンと暗殺者アサシンができる。お兄さんの短剣を貸して

暗殺者としての能力は使えるな、よし、レーナさんに狙撃手スナイパーを抑えてもらつて俺と刀衣で黒い鎧の男を倒す。

「刀衣、これを使うんだ。一緒に倒そう

「うんっ

刀衣は短剣『ステイレット』を構え黒鎧の男に向き直る。

「レーナさん、狙撃手を任せる。俺と刀衣で黒鎧の男を倒す。俺はショウ、こいつは刀衣だ」

俺が名乗ると黒い鎧の男が剣を抜き「コウだ」とだけ名乗る。

そして、刀衣がステイレットを突き出すように突進をする。かわされるがそれは想定内だ、俺がかわす方向の先回りし魔法を放つ。

「《ライトバタフライ》」

これは光の蝶の大群が敵に飛びかかり少しのダメージと確率で短時間行動不能にする魔法だ。

「くっ

「ウガうめき声をあげるが無視をして攻撃をし続ける。

「せやつー」

刀衣が蝶に囲まれているコウにステイレットを突き出す。ステイレットとは本来突く事に特化している武器でその突き攻撃は凄まじい、それに猫人の速度、暗殺者の攻撃力が加わりコウの鎧を突き破り体に突き刺さる。

「くそつ、キンダとつとと済まして援護しろ」

俺が慌ててそいつと戦っているはずのレーナさんを見ると杖

銃は地面に落ち、フラフラしていた。そして

「とどめだぜー」

そう言つてキンダが銃をレーナさんに向ける。そして引き金が引かれるか引かれないかという時になり。

「助つ人さんじょー」

和服姿に日本刀を持った男がレーナさんの前に飛び込み、飛んで来た銃弾をその手に握られた刀で真つ二つに斬る。

「かみにやん」

「やあ、遅れて済まないねえー。主人公は最後に登場するものだからさあー」

「お前が主人公かどうかわからないが助かつた、レーナさんを援護してやつてくれ」

「俺は「ウを相手にしながうかういつとかみにやんから」んな声が帰ってきた。

「おkつてかもつすぐあのおっさんも来るからもういつかの勝ちは確定だ」

「あのれえー、キンダひくぞつ」

「ああ、てめーらあーおぼえてやがれえー。サカスー！」

と捨て台詞を吐いて2人は森の方へ逃げた。

「かみにやん」

「ああ、聞いたさ」

「「あこつり、出来るつ」」

第七話 「あひ、あ」 かとおの園の面話だ「アリマ」 「一マタ」 (後書き)

サカスとはBi-hazard5のアーリングが逃げる時に言った言葉で、あばよという意味です。サカスとはあくまでそう聞こえるというだけです。

第八話 悲しい時は歌えぱい

「つて、二人とも追いかけないと」

レーナさんのその言葉で思い出す。

「あつ」

急いで追いかけないと、でもヨーキが。

「ヨーキをびりじょり」

俺がそう言つた時に。

「おーい、遅れません」

あれは、店長だ。

「店長、ヨーキが

俺が言つと店長は。

「店長はよしてくれ、俺の名はラーケイクだ。イクとでも呼んでくれ。それにヨーキは大丈夫だこの薬を飲ませればすぐにどんな怪我でも治る。大事な一人娘の夫を死なせるわけにやいからな。お前たちは行くといこには任せておけ」

「イクありがとう、俺たちは奴らを追いかけ」

「ああ、 そだかみとやら、 これを持つてけ

「う言つてイクが差し出したのは一つの鞄と日本刀だった。

「この日本刀は天叢雲剣あまのくものかつるぎだ、 今はまだ抜く事はできないが時が経てば抜けるようになる」

それを受け取ったかみにゃんは「サンキュー」とだけ言つて俺とレーナさんと一緒に走り出す。そして。

「私もゆーきーの仇かたきを取る

やつ言つて止めるイクを無視して一緒に来る。

「くそつ、 あこつりビー」行つた

俺は少しキレてやつ言つが奴らは見当たらぬ。くそ、 できる事なら直ぐに発見して罠とかにかかる前に倒したかった。恐らく罠を仕掛けあると思つて置いた方が良いだろう。そう思いこの結論に至つた。そしてその結論は数秒後に実現する。

「うわあ——」

刀衣が地面に張られた紐に足を引っ掛け転んだ、 何と古典的な罠！？ と思いながらも突つ込んでる暇はなかつた。転んだ先は崖崖だからだ。

「刀衣つ

かみにやんがぎりぎりで腕をつかんだのは良かつたんだけど今度は鉄球が飛んで来て2人ごと吹っ飛ばして行った。何というデュアルトラップ

「かーみにやーん、だいじょーぶかー？」

「なんとかなー」

と声が聞こえたので安心する。

「レーナさん、俺たちも氣をつけないとな」

俺がそう言ってレーナさんが「うん」と返事をした時、ガチャと何かの効果音。レーナさんの足元をよく見てみると何かのスイッチを踏んでいた。

そして気がついた時には矢の雨が降っていた。

「うわあああああ

「きやあああああ

《刀衣編》

「ふう、お兄さんありがと」

「いや、まあ人助けは当たり前だからねえー」

ふうん、この人は中々謙虚なんだなと思つたが。

「まあ、僕にかかれば」こんなもの余裕のよつちやんだね

と言い始めた。ゆーきーは無事かな?などと考えながら私はゆーきーに教えてもらつた歌を歌い始めた。

「しょーしゅりきー、みんないすきー、しょーしゅーりきーほ
くもすきー、といれとーおへやにー、しょーしゅーりーきー」

と私が一生懸命歌つていると、お兄さんが急に笑い始めた。

「なんでその歌なんだよおー www」

えつ、何か恥ずかしい歌だつたの?私はそう思つたがゆーきーに初めて教えてもらつた事だつたので私は最後まで歌つた。

第八話 悲しい時は歌えばいい（後書き）

最後の歌ですか？ええ、消 力の歌ですね~~~~~
一応歌詞載せておきます。

消臭力 みんな大好き
消臭力 ぼくも好き
トイレとお部屋に
消臭力

がんばらなくともいいよ
ぼくがそばにいるから
消臭力

消臭力 みんな大好き
消臭力 ぼくも好き
トイレとお部屋に
消臭力

きみが笑ってくれるまで
ずっとそばにいるから
消臭力

消臭力 みんな大好き
消臭力 ぼくも好き
トイレとお部屋に

消臭力

泣きたいときは泣けばいい
ぼくがそばにいるから

消臭力

消臭力 チカラ強く

消臭力 前向いて

地球の反対から

消臭力

みんな同じ空見てるよ

あきらめないで Never Ever

ガンバロー

消臭力

第九話 ティアトリマの騎士

私たちは、しばらくその場所に佇んで沈黙していた。なぜなら私たちの前に1人の女性がいるからだ。その手には2mはありそうな長剣、そして騎士の様な鎧に身を包んでいた。

「君はだれだい？」

お兄さんが尋ねる。すると女性は剣を構えながら答えた。

「私は、ティアトリマの騎士のコーティーだ、そしてこの剣は私の愛剣で魔劍^{オロチ}大蛇だ、以後お見知りおきを」

そのあとにお兄さんも名乗り始めた。

「僕は、流離いの侍の桂峰 神紅だよ、そしてこの刀は魔刀鷹の翼^{ヒタチ}さ」

お兄さんも名乗り刀を構えたので。

「わつ、私は猫人の刀衣です。えつとこれは借り物のステイレットです」

なんというか、2人に比べて全然格好悪い自己紹介になっちゃつたけどまあ良いよね？そう思つていると…カキイーン…と金属がぶつかり合つ音がして何事かと思つたら2人がもう鍔迫り合いをしていた。

「お前、中々の腕前だな。侍というのも侮れないな

「お前こそ、騎士の割には結構やるじやないか」

そうして、一箇所で開戦した。

『レーナ編』

「うぐぐぐぐ

ショウ君は踏ん張つていた、別に排泄物というわけじゃない。私のミスで落とし穴に落ちそうになつた所私を助けようとして飛び込みまかうじて片手で落ちない様に捕まつてる状態だ。

どうしよう、このままじゃ一人とも落ちちゃう。わたしはどうすればいいか考えたが思いつかなかつた。そうして、ある人の声が聞こえた。

「闇夜から降臨する闇のお」

「著作権の問題で登場を拒否します」

とショウ君の声が遮る。

「そんなひどい、じゃあ邪魔の王じやだめ? ねえかしきゃんはど
う」

さう言つとその人の後ろから小さな生き物が出てきた。

「ワタクシはそれでいいと思ひますが」

「ソウネ、かつちゃんもそう言つてゐる事だし。さあて、ワルイコトするわよおー。クライミングをしてるわ、よおーし上に引き上げれば邪魔デキル。ワタシ悪事がデキル」

そう言つてその人が両手を前にかざすと浮遊間が来て私たちは地面に着地した。

「サンキュー、オウサマ落とし穴に引っかかつて危なかつたんだ」

「ノーン、またやつてしまつたー」

そう言つて何処かへ行つてしまつた。なんだつたんだあの人?

《ティア編》

「『主人様、およびいただけて光榮つち

「・・・・・」

なにこれ、容姿はフェレットみたいで名前と全然違つ。ええと、確かこんな時の為の対処法があつたはず。なんだつけたええと・・・

・ そ う だ っ 。

「ねえ口リコソの世界はクーリングオフとかあるの?」

と私が聞くと。

「口リコソと言つのはやめもらえないか、紳士と呼んでもらううか」

そう言つて、耳に息を吹きかけて来た。マズイ、気持ちが良すぎて頭が変になりそうだ、しかもまだ吹いている。まずい、このままじゃ……。とまで行つた所で。

「『主人様から離れろっち』

そう言つてフレットが空中回し蹴りを顔面にヒットさせてなんと20㍍くらいも吹つ飛んで行つた。

「それに、『主人様クリーリングオフ』とするなんてひどいっち、それにそんな制度むこうだつち」

はあ、やつぱりか。私は脱力したがこいつは見かけによらず相当強いんじやないかと蹴りをみて思つた。

「まったく、『主人さ……・伏せるっち』

私はその言葉を聞いて咄嗟に伏せた。すると直前まで私の顔があつた所は何か巨大な腕の様な物が相当なスピードで通過して行つた。

第十話 個々の戦

私は急いで後ろを振り返るとそこには、腐りかけている巨人がいた。^{アンデッドザイアント}死体巨人そんな物聞いた事ないよ。

「あれは巨人の死体を操つてただけだ、だがあのサイズを操るなんて相当な使い手だ。ちなみに俺はあんなの操れない」

ロリコンの強さは知らないがこれはまずいかもしねないそう思つたが。

「ご主人様、僕にまかせるつち」

お? フェレットが勇敢に巨人に立ち向かって行く。そして、まあ多分100000倍以上はあるんじゃないかと思われる巨人の足元にフェレットが歩いて行き足に手をかけ持ち上げ、投げた。・・・・・つて投げた! ? しかもローット団の様にキラーンつてなつたよ。

「あいつの力は底なしか

そう言つロリコンはいつのまにか真横に来ていて肩に手をかけていた。

「離せつ、このロリコン」

「だから~紳士だつてえ~」

このロリコン、力が強くて今の私じゃ逆らえない。けどいまがフェレットがいる。

「フェレット助けてー」

と私が一度言つと。

「『』主人様から離れろつち、でも『』主人様、フェレットじゃない
つち

《シヨウ編》

「で、なんかいつのまにか追いついちゃつたみたいだが」

「そうだね」

今俺たちの前には「ウとキンダがいる。しかもあいつらの顔の驚
き様と来たら。

「何故、ここに・・・」

とコウが言つたので俺は。

「逃げ切れるとでも思つたか?」

「くつ、まづいよコウ。とにかく今は逃げよつ」

そう言つて2人が反対方向へ逃げようとしたらその方向から2人
の人影が見えた。

「ユーキ、イク」

とレーナさんが言つた。

「へへっ、心配させたな」

「さあて、逆転劇の始まりだあ」

これで実質4対2だ。俺たちの勝ちは決定的だ、そのはずだった。

「仲間がいるのはお前たちだけじゃないさ」

その声を聞いて見上げると5人の人がいた。

「ティー、2人の回復を任せる。よし、ラック、コール、ペオル
俺たちでそこの4人を始末するぞ」

「」「」「おつり」「」

そうして、ペオルはイクと戦い、レーナさんはゴール、コーキは
ラック。そして俺は・・・

「さあて、こちらも始めようか?」

リーダーと思われるやつと戦闘だ。

《イク編》

つぐ、他のやつの援護は期待できそうにないか。それにしてもペ
オルと言つたか。体に出ている鱗、それに紫色の翼。

「お前、竜人か?」

「そつ言つ事だ、行くぞつ『半竜化』」

そしてペオルは竜のなりかけへと姿を変えた。これは俺も本気を出さないとまずいな。

「では、俺も『獣人化』」

大柄な男は大きな熊へと姿を変えた。

「ほう、お前は熊か、だが竜には勝てないな」

ペオルが翼を羽ばたかせながら言つ。確かに竜に熊が勝てるはずがない、しかしあくまで力の話だ。熊には竜にない強さがある。

「『やはははは、それじや熊いただいぢや おつかなあ』

「できるものならやつてみるつ」

『レーナ編』

「『ールつて言つたわね、私はレーナよ。見ての通り魔銃士よ』

そう私が言つと『ールつて人は頭をぼりぼりかいたあとに』

「僕、『ール、ランサー槍師』」

そう言つて槍を構える。私はそれをみて本気でいつても負けると思つた。けど、時間さえ稼げれば他の誰かが助けてくれるはず。

《ゴーキ編》

「俺はゴーキ、魔法戦士だ」

「俺はラック、トランサー変身者だ」

変身者といえば、相当なクラスのジョブである事が分かる。まあ
いけど・・・負ける気は、ないっ!!。

《ショウ編》

「召乗つておぐ、俺はショウだ。治療師をやつている」

そう言つて俺は拳を構える。武器がないのは辛いがそれでもやる
しかない。そんな俺の気持ちを感じ取つたかどうかは知らないが、
男は剣を俺の前に投げた。

「俺は、ゴウだ。剣を取れ、それが勝負開始の合図だ」

「ゴウと言つやつはなかなか礼儀がなつてゐる様だな。俺はそう思
い、剣を取る、直後にゴウが距離を詰めて来る。

-----カキイイイイン-----

金属同士がぶつかり合つ音、俺は圧倒的に押されていた。

一瞬の愕然の後、直ぐに距離を離す為にバックステップを
取るがゴウはそのまま突つ込んで来る。上から振り下げられた剣を
俺は剣を横に構え受け止めるがその勢いが強すぎて俺は後ろに吹つ
飛び急斜面を転がり落ちる。

第十一話 外伝・消えた一つの灯火

「それでは2人とも口を瞑つて下さい、私がいいと言つまで開けないで下さいね」

ティーがそう言つと2人とも口を瞑る。そしてしばらく時が立つたら「いいですよ」と声が聞こえたので口を開けると、そこにはティーの他にもう2人男がいた。そして大型のライフルを持った方が口を開く。

「よお、偽物さん方。俺たちのふりをしていて楽しかったかい？」

「ま、まさか本も・・・ぐはあ」

大型ライフルの銃口から出た光がライフルを持った男の頭を吹き飛ばす。

「うわあ、頼む。助けてくれ、この通りだ。金が必要だつたんだ、娘が病氣で薬が必要なんだ。この通りだ、見逃してくれ」

黒い鎧の男は土下座をする。もう1人大型のライフルを持つてない方の男が近寄る。

「どうか、娘の為にか。それじゃあ仕方がない・・・なんて言うと思ったかあ？偽りさんよお」

男が頭を踏み潰す、その力があまりにも強く男の顔は砕ける。

「ひつー？」

流石にそれはティーも怖がつた。踏み潰した男は「ああすまないな」とだけ言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7775y/>

World of Fantasy 改訂版

2011年12月1日21時50分発行